

二〇〇三年七月二〇日

聖なるものであること（一三四）

ペテロの手紙第一・一章一節～二一節

きょうも、これまでお話してきました、私たちが聖なるものであることが、私たちに与えられている望みとかかわっているということについてお話しします。

ペテロの手紙第一・一章三節、四節に記されていますように、父なる神さまは「大きなあわれみのゆえに」、御子イエス・キリストの十字架の死によって私たちの罪を贖ってください、私たちをイエス・キリストの死者の中からのよみがえりにあずかせてくださって、新しく生まれさせてくださいました。それによって、私たちは「生ける望み」と「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産」をもつ者となりました。この場合、「生ける望み」をもつことと「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産」をもつことは、同じことの二つの面です。

ここで言われている「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産」の「資産」は、相続財産のことです。日本語で「相続財産」と言いますと、親が死んだ後に子に残すものです。けれども、神さまはいのちそのものであられて、死というものはありませんし、死が影を落とすことさえありません。また人間の親子の場合の相続財産は、目に見える財産を指しています。けれども、聖書で示されている神の子どもが受け継ぐ相続財産の中心は、目に見える地上の財産ではなく、神さまご自身です。神さまを相続財産として受け継ぐということは、神さまとの愛にあるいのちの交わりに生きるようになることを意味しています。そして、そのことが現実になるように、神さまはこの世界をご自身がご臨在される「神殿」としての意味をもった世界としてお造りになりました。そして、神のかたちにお造りになった人間を、ご自身がご臨在されるこの世界に住まわせてくださいました。

このように、人間の親子の間で受け継がれる相続財産は、親の死を前提として子に受け継がれるものですが、神の子どもとしての私たちが受け継ぐ相続財産は、そのような「親の死」を前提としていません。それならどうして、ここ

で相続財産を表すことばが用いられているのかということが問題となります。このことにつきましてはすでにお話ししましたので、結論的なことを確かめるだけにして、そこからさらにお話を続けたいと思います。

ここで相続財産を表わすことばが用いられているのは、私たちが受け継いでいる相続財産について、四節で、

これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。

と言われていることから分かりますように、この相続財産は、私たちが受け継いでいるけれども、今はまだ完全に私たちのものになっていないという一面があるからです。人間の親子の間で受け継がれる相続財産は、親の死という、それまでの歴史の区切りにおいて受け継がれるものです。これに対して、私たちが受け継ぐ相続財産は、終わりの日という、この世の歴史の最終的な区切りにおいて、完全に受け継ぐようになるものなのです。その意味で、私たちが最終的に相続財産を受け継ぐことは「終末的」なことです。

\*

神の子どもたちが相続財産を受け継ぐことが終末的なことであるということ、地上的なひな型においてではありませんが、すでに古い契約の中で示されていたことです。きょうは、このことについてお話ししたいと思います。

繰り返しお話ししていますように、古い契約の中では、アブラハムに与えられた契約が、相続財産と相続人にかかわる契約です。古い契約は地上的なひな型をとおして、やがて来たるべきまことの贖い主によって実現する贖いの恵みと祝福をあかしています。このアブラハムに与えられた契約においては、カナン<sup>1</sup>の地がアブラハムの子孫に与えられた相続財産として約束されています。

主がアブラハムに語られたことばを記している創世記一七章七節、八節に、  
わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。

と記されているとおりです。

主がアブラハムに約束されたカナンの地にアブラハムの子孫が入るようになってからも、やはり、ひな型としての意味をもっていました。そして、それは、主がこの世の歴史を区切られるという意味での「終わりの時」を、地上的なひ

な型の形で表わしていました。

そのことを、アブラハムに与えられた約束とのかかわりで見てみましょう。先週は創世記一五章一節―六節に記されている、アブラハムが主と主が約束してくださったことを信じて義と認められた、ということについてお話ししましたが、これに続く七節―二一節には、次のように記されています。

また彼に仰せられた。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデヤ人のウルからあなたを連れ出した主である。」彼は申し上げた。「神、主よ。それが私の所有であることを、どのようにして知ることができましょうか。」すると彼に仰せられた。「わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩とそのひなを持って来なさい。」彼はそれら全部を持って来て、それらを真二つに切り裂き、その半分を互いに向かい合わせにした。しかし、鳥は切り裂かなかつた。猛禽がその死体の上に降りて来たので、アブラムはそれらを追い払った。日が沈みかかったころ、深い眠りがアブラムを襲った。そして見よ。ひどい暗黒の恐怖が彼を襲った。そこで、アブラムに仰せがあった。「あなたはこの事をよく知っていないさい。あなたの子孫は、自分たちのものではない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。しかし、彼らの仕えるその国民を、わたしがさばき、その後、彼らは多くの財産を持って、そこから出て来るようになる。あなた自身は、平安のうち、あなたの先祖のもとに行き、長寿を全うして葬られよう。そして、四代目の者たちが、ここに戻って来る。それはエモリ人の咎が、そのときまでに満ちることはないからである。」さて、日は沈み、暗やみになったとき、そのとき、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、あの切り裂かれたものの間を通り過ぎた。その日、主はアブラムと契約を結んで仰せられた。

「わたしはあなたの子孫に、この地を与える。

エジプトの川から、

あの大川、ユーフラテス川まで。

ケ二人、ケナズ人、カデモ二人、ヘテ人、ペリジ人、レファイム人、エモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人を。」

ここでは、主がアブラハムとアブラハムの子孫にカナンの地を与えてくださることを約束してくださったことが記されています。

アブラハムが「三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊」を二つに切り分けたことは、そこに記されてはいませんが、主に命じられたことにしたがってのことです。これはその当時の文化の中で契約が結ばれたときの状況を反映しています。契約を結ぶ者たちは、契約を結ぶに当たって、そのように二つに切り分けた生き物の間を通りました。それによって、もしその契約に違反したなら、契約の証人である神が契約の呪いとしてのさばきを下して、契約に違反した者は、この切り裂かれた生き物のようになるということを表わしていました。つまりこれは、これから死を制裁とした誓約がなされることを表わしています。

そして、一二節では、

日が沈みかかったころ、深い眠りがアブラムを襲った。そして見よ。ひどい暗黒の恐怖が彼を襲った。

と書かれています。この「深い眠り」は、最初の女性の創造を記している第二章一二節で、

そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので彼は眠った。それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。

と書かれています。この「深い眠り」と同じで、そこに主の特別な働きかけがあったことを示しています。そして、「ひどい暗黒の恐怖」は、一般に、そこでアブラムに語られたこと、特にアブラハムの子孫が他国で奴隷となって苦しむことにかかわっていると考えられています。ただ、ここでアブラハムに語られたことの中心はアブラハムの子孫の苦難のことではなく、アブラハムの子孫が最終的にカナンの地を所有するようになるということです。その意味では、この「ひどい暗黒の恐怖」は、神である主のご臨在に触れたこと自体によってもたらされたものであるとも考えられます。その場合、これは神である主の自己啓示としての意味をもっていますので、主がアブラハムの子孫を奴隷とするエジプトや、カナンの地の住民たちをおさばきになる方であることをお示しになっているということによっていると思われるます。このように考えることは、後ほどお話しすることと調和しています。

また、一七節で、

さて、日は沈み、暗やみになったとき、そのとき、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、あの切り裂かれたもの間を通り過ぎた。

と言われているときの「煙の立つかまどと、燃えているたいまつ」は、神の栄

光の顕現（セオファニー）で、そこに神である主のご臨在があることを表わしています。

注目すべきことに、ここでは、神である主だけが二つに切り分けられた生き物たちの間を通り過ぎました。これによって、このときアブラハムに約束されたことは、神である主がご自身の存在に賭けて実現してくださるということを示してくださったのです。アブラハムに求められていることは、このように主が約束してくださったことを信じることです。

\*

アブラハムの子孫がカナンの地を所有するようになることについては、一六節で、

そして、四代目の者たちが、ここに戻って来る。それはエモリ人の咎が、そのときまでに満ちることはないからである。

と言われています。この「四代目の者たち」というのは、一三節に記されている、

あなたの子孫は、自分たちのものでない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。

という主のことばを受けています。この四百年は一世代を百年とすることは今日の発想からはおかしいと思われませんが、その当時には人の一生としては百年を理想とするというような発想があつたようです。五〇章二二節、二六節では、ヨセフはその百十歳で死んだと言われています。

アブラハムの子孫を奴隷とするようになる国とは、ここでは明らかにされていませんが、エジプトのことです。アブラハムの子孫がカナンの地を所有するようになることには、通らなければならぬ段階があることが示されています。それは、アブラハムの子孫が地上的なひな型として示している主の契約の民が、造り主である神さまに対して罪を犯して御前に墮落してしまっており、暗やみの圧制の下で奴隷化されてしまっているという現実を表わしています。そのような暗やみの地からの圧制からの解放ということを経なければ、真の贖いはあり得ないわけです。

これは、アブラハムの子孫が他国すなわちエジプトの奴隷となつてから四百年後、「四代目の者たち」が奴隷の地から贖い出されてカナンの地に帰つてきて、この地を所有するようになるという預言と約束のことばです。しかし、これはただそのことだけを預言的に約束するだけではなく、

それはエモリ人の咎が、そのときまでに満ちることはないからである。

という主のことばに示されていますように、アブラハムの子孫がカナンの地に帰ってくることは、カナンの地を罪で満たすようになる民に対するさばきとしての意味をもっているということが示されています。ここで「エモリ人」は、その後の一九節〜二一節において挙げられている一〇の民族を代表していると考えられます。

このことは、主の贖いの御業には救いとさばきの二つの面があることを受けています。それは、アブラハムの血肉の子孫であるイスラエルの民がエジプトの奴隷の身分から贖い出されることにおいても見られます。一三節、一四節に記されていますように、主はアブラハムに、

あなたはこの事をよく知っていなさい。あなたの子孫は、自分たちのものでない国で寄留者となり、彼らは奴隷とされ、四百年の間、苦しめられよう。しかし、彼らの仕えるその国民を、わたしがさばき、その後、彼らは多くの財産を持って、そこから出て来るようになる。

と言われました。主は、アブラハムの子孫を奴隷の身分から贖い出してくださいる時に、アブラハムの子孫を奴隷としている民をおさばきになると言われました。そして、さらに、アブラハムの子孫がカナンの地を所有するようになる時には、その地を罪で満たしている民をおさばきになるということです。

\*

このように、アブラハムの子孫がカナンの地を所有するようになることは、アブラハムの子孫だけの問題ではなく、その時までにはカナンの地を罪によって満たすようになるカナンの地の住民たちに対するさばきとしての意味をもっています。その意味で、アブラハムの子孫がカナンの地を所有するようになることは、終末的な意味をもったことです。アブラハムの血肉の子孫がカナンの地を所有するようになることは、アブラハムの信仰にならう、アブラハムの霊的な子孫が相続財産を受け継ぐようになることを、地上的なひな型として示しています。そして、ここで、アブラハムの子孫が相続財産を所有するようになることは、終末的な意味をもっていることが示されています。

この場合、カナンの地に住んでいた民はアブラハムの子孫を奴隷としていたわけではありません。イスラエルの民がエジプトの奴隷として苦しんでいた間に、それらの民はそこから離れたカナンの地に住んでいました。それらの民がさばきを受けるのは、その民たち自身の罪のためです。このことは、主が全世界

世界の主として、全世界の民をおさばきになる方であるということをあかしするものです。その意味でも、アブラハムの子孫がカナンを所有するようになることは、一つの民族の終末ということと終わらないで、全世界の終末ということを指し示しています。

そのことは一八節〜二一節に記されている、

その日、主はアブラムと契約を結んで仰せられた。

「わたしはあなたの子孫に、この地を与える。

エジプトの川から、

あの大川、ユーフラテス川まで。

ケニ人、ケナズ人、カデモニ人、ヘテ人、ペリジ人、レファイム人、エモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人を。」

という主のことばの中で、カナンの地の住民の名をを挙げる前に、

エジプトの川から、

あの大川、ユーフラテス川まで。

というように、その当時のオリエント世界全体を表わすことばが用いられていることにも表われています。

また、このことは、さらに、アブラハムの血肉の子孫がカナンを所有するようになることが、アブラハムの信仰にならうアブラハムの霊的な子孫が全世界を受け継ぐということを示し、古い契約の地上的なひな型であるということを示しています。そのことを受けて、パウロはローマ人への手紙四章一三節〜一六節で、

というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいはまた、その子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰の義によったからです。もし律法による者が相続人であるとするなら、信仰はむなしくなり、約束は無効になってしまいます。律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。「わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした。」と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。

と述べています。

一三節では、アブラハムとアブラハムの信仰にならうアブラハムの子孫に与えられたのは、「世界の相続人となるという約束」であったと言われています。アブラハムの血肉の子孫がカナンの地を所有するようになることは、アブラハムの信仰にならうアブラハムの霊的な子孫が全世界を相続するようになることを指し示す地上的なひな型でした。

このように、約束の贖い主としてきてくださった御子イエス・キリストの十字架の死と死者の中からのよみがえりにあずかって神の子どもとしていただいている私たちが受け継ぐ相続財産は、終末の日になされる全世界のさばきと深くかかわっています。ペテロの手紙第二・三章一〇節〜一三節に、

しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとすれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならぬことでしょう。そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。

と記されているとおりです。

この世の人々にとっては、もしそのようなことがあれば最も恐るべきことである世の終わりは、神の子どもにとっては心から待ち望んでいる日であるのです。

私たちが相続財産を受け継ぐということは、世の終わりの栄光のキリストの再臨の時に完全な形で実現することです。それで、私たちはその完全な実現を待ち望んでいます。それは、その時に「私たちの天下」が来るからではありません。そうではなく、私たちの受け継いでいる相続財産の中心が父なる神さまご自身であり、私たちが御子イエス・キリストにあつて父なる神さまとの愛にあるいのちの交わりに生きることであるからです。この御子イエス・キリストにある父なる神さまとの愛にあるいのちの交わりは、神の子どもである私たちの受け継いでいる相続財産の中心です。そして、それは終わりの日に完全な形で実現しますので、私たちはそれを切に待ち望んでいます。この意味で、ペテロの手紙第一・一章三節、四節に記されている「生ける望み」と「朽ちること



も汚れることも、消えて行くこともない」相続財産は一つのものであるのです。

\*

これまでお話ししてきたことのかかわりで、ヘブル人への手紙六章一三節  
二〇節に記されていることを見てみましょう。そこには、

神は、アブラハムに約束される時、ご自分よりすぐれたものをさして誓うことがありえないため、ご自分をさして誓い、こう言われました。「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたを大いにふやす。」こうして、アブラハムは、忍耐の末に、約束のものを得ました。確かに、人間は自分よりすぐれた者をさして誓います。そして、確証のための誓いというものは、人間のすべての反論をやめさせます。そこで、神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはつきり示そうと思ひ、誓いをもって保証されたのです。それは、変えることのできない二つの事がらによって、――神は、これらの事がらのゆえに、偽ることができません。――前に置かれていた望みを捕えるためにのがれて来た私たちが、力強い励ましを受けるためです。この望みは、私たちのたましいのために、安全で確かな錨の役を果たし、またこの望みは幕の内側にはいるのです。イエスは私たちの先駆けとしてそこにはいり、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司となられました。

と記されています。

ここで、

神は、アブラハムに約束される時、ご自分よりすぐれたものをさして誓うことがありえないため、ご自分をさして誓い、こう言われました。「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたを大いにふやす。」こうして、アブラハムは、忍耐の末に、約束のものを得ました。

と言われていることは、アブラハムがその子イサクをささげた時のことを記している創世記二二章一五節―一八節に、

それから主の使いは、再び天からアブラハムを呼んで、仰せられた。「これは主の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたの一とり子を惜しまなかったから、わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるように

なる。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」

と記されていることを受けています。

それは先週お話ししましたように、一五章一節～六節に記されているアブラハムが主と主の約束を信じて義と認められたときの信仰が生きて働く信仰であり、その信仰によって、主のみこころにしたがってイサクを主にささげたという意味をもっていました。その意味では、

こうして、アブラハムは、忍耐の末に、約束のものを得ました。

ということとは、アブラハムの子孫に関する約束を受けて、それを信じて義と認められてからイサクをささげるに至るまでのアブラハムの信仰の歩みを指していると考えられることもできます。先週お話ししましたように、約束を与えられてから一五年以上の時が経って、やっと約束の子であるイサクが生まれました。まさに、

こうして、アブラハムは、忍耐の末に、約束のものを得ました。

ということばがそのまま当てはまります。

けれども、ヘブル人への手紙の著者が、

こうして、アブラハムは、忍耐の末に、約束のものを得ました。

と言っていることの中心は、その後、さらにイサクがある程度の年齢になってから、アブラハムは主のみことばにしたがってイサクをささげた時のことです。アブラハムがその子イサクをささげたことがどういう意味であるかは、先週も引用しました一七章一七節～一九節に記されていることの光で理解する必要があります。そこには、

信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼

は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。

神はアブラハムに対して、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」

と言われたのですが、彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です。

と記されています。

詳しい説明は省きますが、この時、アブラハムはイサクを主にささげました。

主が雄羊を備えてくださったのは、イサクをささげなくてもよいという意味ではなく、アブラハムがイサクをささげたことを、その雄羊をささげることによって完遂させてくださったという意味です。それで、イサクはアブラハムの血肉

のつながりの子ではなくなり、主のものとなりました。アブラハムは、その主のものとなったイサクを新しく与えられたのです。アブラハムについて、

彼は、いわば、死者の中からイサクを取り戻したのです。

と書かれているとおりです。これが、六章一五節で、

こうして、アブラハムは、忍耐の末に、約束のものを得ました。

と書かれていることの中心でしょう。

\*

六章に戻りますが、一七節には、

そこで、神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはつきり示そうと思い、誓いをもって保証されたのです。

と記されています。すでにお話ししましたように、アブラハムの子孫についての約束を与えてくださった時に、主は一方的な誓いによってそれを保証してくださいました。アブラハムにはその約束を信じるのが求められただけです。それで、アブラハムは生きて働く信仰によって歩み続けました。そして、ついに約束のものを得ました。

このことを受けて、一八節では、

それは、変えることのできない二つの事からによって、——神は、これらの事からのゆえに、偽ることができません。——前に置かれている望みを捕えるためにのがれて来た私たちが、力強い励ましを受けるためです。と書かれています。

ここで「変えることのできない二つの事から」というのは、神である主が約束してくださったということと、さらに、それを誓いをもって保証してくださいましたということです。主が約束してくださいただけでも確かなことですが、それをさらに誓約によって補強してくださいただけということです。これ以上確かなことはありません。それで、

神は、これらの事からのゆえに、偽ることができません。

と注釈されています。

そして、このことが、続いて、

前に置かれている望みを捕えるためにのがれて来た私たちが、力強い励ましを受けるためです。

と書かれていますように、私たちの「前に置かれている望みを捕える」とことと深く結びつけられています。私たちの望みは、契約の神である主ご自身の約束

と、それを保証する誓いによって支えられているのです。

ここでは「のがれて来た私たち」と言われていますが、これは、一章三八節で、

この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。

と言われていることや、一三章一三節、一四節に、

ですから、私たちは、キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。私たちは、この地上に永遠の都を持つていてるのではなく、むしろ後に来ようとしていてる都を求めているのです。

と記されていることに沿っていると考えられます。私たちはこの世から逃れて主の御許に行くのです。

私たちは神である主の約束と、それを保証してくださいと誓いによって支えられている「生ける望み」によって生かされています。そして、六章に帰りますが、そこでは、続く一九節、二〇節に、

この望みは、私たちのたましいのために、安全で確かな錨の役を果たし、またこの望みは幕の内側にはいるのです。イエスは私たちの先駆けとしてそこにはいり、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司とられました。

と記されています。普通に読んでいきますと、ここに記されていることは、何となく場違いな感じがします。アブラハムの話に出エジプトの時代を思わせる「幕の内側にはいる」ということが出てくるのが唐突な感じがします。しかし、このことには意味があります。

ことばの問題ですが、一九節で、

またこの望みは幕の内側にはいるのです。

と言われていることは分かりにくい気がします。これは、二〇節で、イエス・キリストが「私たちの先駆けとして」すでにお入りになっておられると言われている「幕の内側にはいる」望みのことを述べています。この「幕の内側」は地上的なひな型としての聖所の奥の至聖所を表わしています。言うまでもなく、これは地上の聖所の表象で表わされたもので、九章二四節に、

キリストは、本物の模型にすぎない、手で造った聖所にはいられたのではなく、天そのものにはいられたのです。そして、今、私たちのために神の御前に現われてくださるのです。

と記されていますように、イエス・キリストが入られた「天そのもの」を指し

ています。そこでイエス・キリストは、父なる神さまの右の座に着座して、大祭司のお働きをしておられます。これによって、私たちは私たちの大祭司であられるイエス・キリストをとおして、父なる神さまのご臨在の御前に近づくことができず。そして、礼拝を中心として、父なる神さまとの愛にあるいのちの交わりにあずかることができます。

これらのことを踏まえて六章一三節―二〇節に記されていることを全体として見てみますと、ここでは、神である主がアブラハムに約束してください、さらに誓いをもつて保証してくださいことは、最終的に、私たちがすでにイエス・キリストが「私たちの先駆けとして」お入りになっっている天にあるまことの聖所に入ることによって実現するということが示されていること分かります。それを地上的なひな型としてのアブラハムの子孫に当てはめて言いますと、アブラハムの子孫がカナンの地を所有するようになるということの中心は、そこにおいて主の神殿が建てられ、アブラハムの子孫が主のご臨在を中心として生きるようになるということになりました。ですから、アブラハムに与えられた約束の話の最後に、信仰によるアブラハムの子孫が、天にあるまことの聖所に入る話が出てくることは、決して唐突なことではなく、むしろ主のみこころに沿ったことであるのです。

今私たちは、私たちの大祭司であられるイエス・キリストの御名によって、天にあるまことの聖所に入って、父なる神さまとの充滿な愛にあるいのちの交わりにあずかるというに望みよって生きています。そして、この望みは、神である主の約束と誓約という二重の保証の上に立っている「生ける望み」であるのです。